

青井阿蘇神社 / 歴史と、本殿・廊・幣殿・拝殿・楼門の建築物について

青井阿蘇神社は、人吉球磨地方に現存する最古の神社です。この神社の歴史は 806 年にさかのぼり、その設計は 794 年に建てられた平安京（現在の京都）に似ています。この神社に現存する建物のほとんどは、1610 年にさかのぼるものですが、複数の建築様式を融合したもので、装飾の細部は珍しいものです。青井阿蘇神社の意匠はたいへん統一されており、独特な美学があります。この美しさは、九州南部一帯にその後建てられた神社にも見ることができます。青井阿蘇神社における建物の統一性は、歴史のある神社には稀なものです。ほとんどの神社では、異なる時代の建物が混在しているからです。楼門、拝殿、幣殿、本殿、およびこれらをつなぐ廊は、国宝に指定されています。

文化の洗練

この神社は南北を軸に配置されており、北には山々、東には川、南には池、西には道があります。これは、「五行」の原則に従ったものです。「五行」とは、古くからの概念枠組であり、中国の占いと風水の基礎になっています。平安京（京都）は、同じ原則に従って、この神社よりも 12 年前に建てられました。これらの特徴が共有されていることは、都からはるか遠くのこの地域において、稀な水準まで文化が洗練されていたことを示しています。

神社の象徴

拝殿への道は、2 階建ての楼門を通って続いています。楼門は高さ 12 メートルで、屋根は急な角度の茅葺屋根です。欄間の彫刻には、儒教の教えである「二十四孝」が描かれており、四つ角には 4 対の白鬼が顔を覗かせています。この白鬼の彫刻は、この種の彫刻としては日本で唯一知られているもので、喜怒哀楽を表しています。

活き活きとした彫刻

この儒教の教えは、拝殿および他の建物にわたって続きます。牡丹に囲まれて戯れる神話上の獅子の彫刻、雲から現れる龍の彫刻、また藤や他の花々を繊細に表した彫刻とともに、儒教の教えが描かれています。これらの構図は、華やかで縁起のよいものであり、桃山時代（1573～1615 年）に一般的だった様式を用いています。

複数の様式の珍しい組み合わせ

この桃山様式の美学が、禅宗が栄えた 12～13 世紀に人気のあった細部の意匠と組み合わせられています。これらの意匠には、とがった楕円形の板、ひさしへと遠く伸びる尾垂木を支える「斗拱」(ときょう。段をつけて肘木を組み合わせたもの)、つなぎ梁の端の飾り、といったものがあります。本殿の扉には、真言宗のモチーフが描かれています。また、幣殿と本殿の側面の壁板には、木を交差させた当て木があります。これは、人吉球磨地方以外の神社建築では、あまり見られない特徴です。

